



## 神のことばの主日（年間第3）（マルコ 1:14-20）

イエスが「あなたに話したいことがある」と言っています

先週に引き続き、今週も公開の主日ミサが中止になっています。フランシスコ教皇様は何かを察知しておられたかのように、今週年間第3主日の呼び方を「神のことばの主日」と命名されました。

ミサの「聖体の食卓」に参加できない中で、「みことばの食卓」がとても重要になってきます。みことばに養われるならば、それは霊的な聖体拝領をすることでもあります。しっかりと今週の朗読箇所を耳を傾けましょう。

イエスがガリラヤで宣教を始めましたが、そもそも人はどんなときに話を聞いてくれるのでしょうか。二つ考えてみました。一つは、借りてきた言葉ではなくて、自分の中から出てくる言葉で話している時です。

イエスの言葉は、誰かに学んだものではなく、イエスご自身の言葉、誰にも教えられていない「新しい言葉」でした。聞いた人々が「これはいったいどういうことなのだ。権威ある新しい教えだ。この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く」（マルコ 1・27）と驚いた「新しさ」がありました。

もう一つは、「私に話してくれている」と感じる言葉です。どんな人でも自分に関係ないと思えば話を聞き流してしまいます。けれども自分に関係があると思えば、少々難しい話でも理解しようと耳を傾けるのです。宣教するイエスのことばには、これら両方の特徴が備わっていました。誰かの話を借りることなく、それでいて一人ひとりに語りかけている話し方でした。

イエスのこうした語りかけが、ガリラヤの漁師たちの心に響きました。いわゆる「偉い人」の話であれば、気にもかけなかったかも知れません。ですがシモンとアンデレ、ヤコブとヨハネは、生活が一変するかも知れない呼びかけにじっくり耳を傾け、人生を賭けてイエスに従ったのです。

私はかつて、リュウマチでずっと寝たきりだった奥さんを見送ったご主人とご遺族に、通夜でこんな話をしたことがありました。「奥さんは十分十字架を担いました。ご自分のためだけではなく、多くの人の救いの分まで、担っていました。それができたのは、イエス様といつも一緒に十字架を担っていたからです。寝たきりだったのに、中田神父などよりよほど、信仰を証しして生涯を終えたのです。」

幸いにこのあいさつはご遺族に届きました。借り物の言葉ではなく自分の言葉で語る。一人ひとりに話す。これらがどんなに大切かを知った時でした。それ以後、ずっと、通夜と葬儀で守っているやり方です。

私たちは今、ミサのない日曜日を過ごし、「みことばの食卓」に着いています。与えられた朗読箇所から、「新しい語りかけ」「自分のためになされている語りかけ」を見つけ、大切に温めましょう。必ず、イエスは私たちを養うみことばを、今日も用意しておられます。